

生徒が主体的に学びに向かう地理歴史科の授業を目指して
ー 生徒の興味・関心を引き出す教材と指導法の工夫を通して ー

石巻市立桜坂高等学校 木村 智則

1 目指す授業像

- (1) 生徒の「知りたい」という思いを引き出し、主体的に学びに向かう姿勢を培うことのできる授業
- (2) 生徒が歴史を身近に捉え、歴史を学ぶ面白さを実感できる授業

2 研修テーマ・目指す授業像に迫るために

本校の生徒の中には、地歴公民の科目に対する苦手意識があり、また、興味・関心のない生徒が多い。本研修の実践を行う選択科目世界史Bの授業でも、消極的な理由で選択した生徒の割合が大きい。年度初めに行ったアンケートで歴史に対する興味・関心の有無について質問したところ、「ない」と回答した生徒が9名中7名で、歴史に対する興味が薄く、授業でも意欲を持って学ぶことができないため、テストの時のみ学習してきたという内容の記述が多く見られた。また、興味を持てない理由としては、「難しいから」「中学の頃から覚えるものは苦手だから」「昔の事だから」などの回答が目立ち、歴史の学習は暗記だという認識や、歴史は自分にとって身近でないものという考え方が根強いことがうかがえた。

私のこれまでの授業を振り返ると、ICTの活用等を通して生徒の興味・関心を引き出す工夫を行ってきたにもかかわらず、生徒の意識を変えることは難しく、歴史を学ぶ面白さを十分に伝えることができていなかった。その要因として、ワークシートの工夫が足りなかったり、授業のねらいと合わない形で資料を使用したりしていたことが考えられる。また、授業を通じて生徒が自ら抱いた疑問や興味・関心をつかみきれず、その後の授業や授業以外での主体的な学びにつなげることができていなかった。

そこで、授業において歴史に対する生徒の興味・関心を引き出し、主体的に学びに向かう姿勢を培うためには、教材と指導法の更なる工夫が必要であると考え、具体的には、以下の授業改善のための取組を実践した。

(1) 生徒の興味・関心を引き出す教材の工夫

① 生徒の実態に即したワークシートの作成

生徒の理解を助け、生徒に無理なく考察を促すことのできるワークシートを作成し、授業で活用する。作成する際は、歴史が苦手な生徒であっても取り組みやすく、感じたことや考えたことを自分なりに表現できるように、問いや課題を工夫する。また、歴史的事象を具体的にイメージできるような資料を掲載し、加工や配置等、掲載方法にも工夫をする。

② 視覚資料の提示方法

絵画等の資料を全体に提示する際は、授業のねらいに即した効果的な資料を選択した上で、ICTを活用して見せ方やタイミングを工夫し、提示方法が単調にならないように変化を与えることで、意図や強調したい部分を明確にするとともに、生徒の興味・関心を引き出したい。

(2) 生徒の興味・関心を引き出す指導法の工夫

① 当事者の立場に立った考察

一人一人が主体的に取り組むことができるとともに、歴史を学ぶ面白さを感じることもできる工夫として、歴史的事象について考察する際、客観的に意義や影響を分析するだけでなく、関わる人物の視点を通して推察する活動を取り入れる。その人物が何を考えていたか、何をしようとしたか、歴史の当事者の立場に立って考えることで、生徒は歴史を身近に感じ、興味・関心を引き出せると考えた。また、生徒が「自分ならこう考える、こうする」という視点を持つことができれば、それを基に、史実はどうであったのか、自分の考えが史実と違うとしたら、なぜなのか、という問いを引き出し、主体的に学ぶ姿勢を培うことができると考えた。

② 協働学習を取り入れた授業展開

ペアやグループでの学習を取り入れることで、授業に対して消極的な生徒であっても参加しやすく、また、一人一人が自身の意見を述べたり互いの意見を聞いたりすることで、様々な考えを知り、歴史を学ぶ面白さを感じることもできるのではないかと考えた。

③ 疑問点を引き出す振り返り

生徒が抱いた感想や疑問を学習プリントや振り返りシートに記入させた。生徒が授業中に抱いた漠然とした感想や疑問を自身で認識し、表現することで、授業後の主体的な学習につながると考えた。また、記入された感想や疑問点は、新しい興味・関心を掘り起こすための糸口として、次時以降の学習につなげることができるようにした。

3 I 期の取組について 【単元名 「西ヨーロッパ中世世界の変容」】(山川出版社 高校世界史B)

(1) 研修テーマに迫るための手立て

I 期では、十字軍を題材として、十字軍が中世ヨーロッパ世界に与えた多面的な影響に気付かせることをねらいとし、教皇の権威衰退、諸侯と国王の力関係の変化、商人の活動の活発化の3つの側面から考察させた。その中でI期の取組として、まず、当事者の立場に立って考察するワークシートを使用することにより、生徒の興味・関心を引き出し、外国の過去の歴史であっても同じ人間が歴史を作ってきたということに気付かせ、歴史を身近に感じさせたいと考えた。また、考察にはジグソー法を取り入れた。そして、次時以降の学習に対する主体的な姿勢を高めるための課題を設定した。さらに、振り返りシートに疑問点を記入させるようにした。

(2) 具体的な手立て

① グループごとに異なる立場で考察するワークシート

生徒の興味・関心を引き出すための工夫として、関係する人々の立場の違いに焦点を当てたワークシートを作成し(図1)、与えられた立場に立って当時の人々が考えていたことや行おうとしたことを推察するグループワークを行った。具体的には、生徒を教皇、諸侯と国王、商人の3つのグループに分け、それぞれの立場の置かれた状況や思惑について、与えられた資料を基に分かることや想像できることを、グループでの話し合いを交えながら考え、登場人物のセリフとして表現させた。ワークシートを作成する際は、生徒が取り組みやすい問い方や資料の配列にも配慮した。また、それぞれの立場に立ってセリフや行動を考えるためには、前提となる知識として、中世西ヨーロッパの封建制度に関する基本的事項の理解が必要である。そこで、前時までの授業で、本時で扱う教皇、諸侯と国王、商人については丁寧に説明し、生徒の理解を促すよう留意した。

② 関連する出来事を予想させる課題

十字軍の及ぼした影響を3つの側面から考察した後に、その影響によって、その後の西ヨーロッパではどのような出来事が起こったのかを予想させる課題をワークシートの最後に組み入れて、実践した。生徒の興味・関心を引き出す方法として、本時の学習内容とそ

A 班 ～ 教皇の指導力への影響についてグループで考えてみよう ～

教皇ウルバヌス2世にとって、ビザンツ皇帝からの救援要請は絶好のチャンスであった。それは、教皇権の真の歴史である。[]に合うように、次の教皇はキリスト教徒に対し、聖地エルサレムがイスラム教徒に占領されていると訴え、十字軍を集めた。熱心なキリスト教徒に与えられた第1回十字軍は、聖地エルサレムに成功する。

Q1. この時の教皇はどんなことを考えていたでしょうか？上の[]に合うように、次の教皇のセリフの空欄を想像してみよう。

教皇の人物画 []

「ビザンツ皇帝が助けてって書いてきたな。どうしよっかな。でもよく考えたらチャンスかも！？恩を売ってあげればビザンツにも感謝されるし、」

「[]で」

「さあ！熱心なキリスト教徒に聖地エルサレムを占領させよう！」

B 班 ～ ヨーロッパ商人への影響についてグループで考えてみよう ～

商人にとって、十字軍は[]チャンスであった。十字軍の遠征が行われることで、様々な地域の間で大量の物資が行き来するからである。

Q1. 十字軍が行われることに対して、商人はどんなことを考えていたでしょうか？上の[]に合うように、次の商人のセリフの空欄を想像してみよう。

商人の人物画 []

「教皇の発表で、十字軍を募集してるらしいね。聖地が奪還できるように頑張るって。僕らにとっては色々な商品が取り引き出来るって、」

「[]」

「チャンスなんだ。じゃーん十字軍お願ひします。」

Q2. 図A・C・Dから、十字軍のルートを比較すると、第2回以降の十字軍では、聖地に向かうためには何が必要だったでしょうか？ []

C 班 ～ 諸侯と国王への影響についてグループで考えてみよう ～

Q1. 中世ヨーロッパ社会では、諸侯と国王の力関係はどのようなものでしたか？ []

諸侯にとって、十字軍は[]チャンスであった。十字軍参加はキリスト教に対する信仰心の現れでもあるが、別の目的を持つ諸侯も多かった。第1回十字軍は聖地エルサレムに成功するが、その裏では参加した各諸侯が遠征先に国を建国した。

Q2. この時の諸侯はどんなことを考えていたでしょうか？上の[]に合うように、次の諸侯のセリフの空欄を想像してみよう。

諸侯の人物画 []

「教皇の呼びかけで第1回十字軍に参加しました。聖地エルサレムが目的で書けるけど、遠征先で」

図1 各グループのワークシート(一部抜粋)

の後学習する内容の間に、意図的に情報の空白を作ることで、その空白を埋めようという意識が生まれ、次時以降の主体的な学習姿勢が培われると考えた。

③ 振り返りシートの記入

本時の最後に、振り返りシートを記入させた。シートには、授業のポイントが理解できていたかを確認するための質問項目を、生徒の実態に合わせて取り組みやすいように穴埋めの形式で記載するとともに、生徒が気になった点や疑問点について確認し、次時以降の授業に生かすため、それらを記述式で記入させる欄を設けた。

(3) 成果と課題 (成果：○ 課題：●)

① グループごとに異なる立場で考察するワークシート

○ 人物のセリフを考える活動では、これまでのプリント学習等では指示された内容や教えられた内容の記入だけに留まっていた消極的な生徒でも、考えたことを自分の言葉で表現しようと努力する姿が見られた。

○ 人物のセリフを考えるために、「これって何だっけ」「これどういうこと」といった会話が生まれ、グループ内で必要な知識を補い合う様子が見られた。

● セリフを考える活動においては、生徒は自分の考えに自信を持てず、正しい答えを教科書等で探そうとしたため、当事者の立場に立った自由な表現を上手く導き出すことができなかった。生徒が授業の中で自分の考えを表現しやすくし、迷うことなく活動に取り組むことのできる問いの精選や工夫が不足していた。

● 課題の分量が多く、資料も生徒に理解させたい資料なのか、興味・関心を引き出したい資料なのか目的が曖昧であった。提示する資料についてはより精選すべきであった。

② 関連する出来事を予想させる課題

○ 十字軍と関連する出来事を予想させる課題では、生徒は、十字軍が与えた影響に基づき、国王に関する出来事やキリスト教に関する出来事などをワークシートに記入することができていた。そして、記入した事項の内容や語句の意味を確認するために、次時以降の内容についても自ら教科書で調べようとする姿勢が生まれていた。

● ワークシートに記入する内容についての指示が不明確であったため、生徒に「考察結果を記入するものか」あるいは「教科書から何かを探すものか」という迷いが生じてしまった。

● 出来事の予想については、生徒の一部には大航海時代や絶対王政との関連を予想し、自分の言葉で説明できるところまでを期待していたが、その基準までたどり着けなかった。意図的な情報の空白を作る上で、既知の情報、すなわち、生徒の歴史に対する知識がどの程度であったのか、その実態を把握せずにワークシートを作成したことが原因であると考えられる。

③ 振り返りシートの記入

○ 生徒の振り返りシートには、「クレルモン宗教会議を詳しく知りたい」「叙任権闘争の意味を理解していなかった」「諸侯の侯と天候の候の違いは何ですか」との記述があった。次時でその疑問点を紹介し説明をしたが、特に、他の生徒から「侯は気付かなかった、間違えて書いていた」という声も上がった。振り返りシートによって、生徒には、授業で学習する語句を単純に受け入れるだけでなく、語句の意味も含めて理解しようという姿勢も生まれた。また、疑問を共有することの有効性や生徒のつまづきのポイントを確認することもできた。一部ではあるが、授業のどのような点に興味を持ち、どのように授業を理解しようとしていたのかという傾向を知ることができ、次時以降の授業での丁寧な説明に生かすことができた。

● 振り返りシートの記述欄には、感じた疑問や分からなかったことなどを自由に記入するよう指示したが、数名はその部分に対する記入がなかった。これらの生徒たちが記入しなかった理由をそれぞれ調査し、振り返りシートの改善や授業時の観察等を通じて、生徒の実態をより正確に把握することが必要である。

4 II期の取組について 【単元名 「フランス革命とナポレオン」】（山川出版社 高校世界史B）

(1) 研修テーマに迫るための手立て

I期の実践では、人物に焦点を当てる工夫によって、歴史的事象を捉える際の方法として、当時の人々がどのように考えていたのかという視点を生徒に与えることができた。また、グループ内で疑問を共有したり、自分で教科書を調べたりする姿も見られ、教材と指導法の工夫によって興味・関心を引き出す効果を確認することができた。

そこでII期の実践では、I期を踏まえ、フランス革命前夜を題材として、フランス革命に関わる各身分の立場に立ち、グループ学習によって異なる立場で考えさせることで、歴史的事象の多面性に気付く、生徒の主体的な学習につながるよう工夫した。その際には、I期の課題にあったように、生徒が迷わずに学習に取り組むことのできる問いを考えて実践した。また、絵画を意識的に使用することで興味・関心を引き出し、その引き出した興味・関心を持続できるように、ICTの活用方法を工夫した。

(2) 具体的な手立て

① 興味・関心を引き出す教材の工夫

導入で「球戯場（テニスコート）の誓い」を描いた絵画を取り上げ、描かれているのがどのような場面かを生徒に予想させることで本時の授業に対する興味・関心を引き出すとともに、この絵画の場面へとつながっていくことを意識しながら革命前の状況を学習できるように意図して授業を展開した。また、電子黒板に絵画や資料を投影する際には、色分けや拡大・縮小、並列させる等の工夫を行って、興味・関心を引き、持続させるよう工夫した。

② 興味・関心を引き出す指導法の工夫

フランス革命の多面性に気付かせることが、興味・関心を引ききっかけになると考えた。そこで、フランス革命前夜の特権身分と第三身分それぞれがどのように考えていたのか、またどのように行動したかを立場ごとに個別やグループで考えさせた。その際には、生徒が考えやすい問いになるよう工夫した。また、授業中に感じた疑問を表面化することで、授業以外の主体的な学習につなげるとともに、次時以降の疑問の共有ができるように、ワークシートに疑問点を記入させた。

(3) 成果と課題（成果：○ 課題：●）

① 興味・関心を引き出す教材の工夫

○ 教材の工夫については、円滑にICTを活用することができたので、生徒の興味・関心を維持することができた。電子黒板での色分けにより、生徒にも自分のワークシートに分かりやすく記入しようという意識が生まれ、記入や補足などの生徒自身の工夫も見られた。

○ 導入に絵画を取り上げた点については、絵画全体の雰囲気について発問したところ、「ケンカをしている」といった、教員の想定していない面白い見方をした生徒もいた。生徒の多くは絵画に対する自分の考えを持つことで、次の授業展開に興味を持って臨むことができた。また、席が近い生徒同士で自然に話し合う姿も見られ、導入として生徒の興味・関心を引き出すには有効であった。

● 電子黒板の拡大・縮小、色分け等の工夫について、授業展開の1つのポイントのみで扱い、次展開では消さざるを得なかったため、イメージを膨らませ、共有させるためにも、電子黒板の画像を残しておく手段を考えるべきであった。

② 興味・関心を引き出す指導法の工夫

○ 当事者の立場に立った考察では、グループの中で自分達なら具体的にどうするかを積極的に話し合う姿が見られ、歴史的事象を多面的に捉えて考察する面白さを実感できた生徒もいた。

● 当事者としてどのように考えるかを話し合う活動では、特権階級と第三身分の対立関係を維持した状態での考察を意図していたが、対立関係を解消させようとする、教員の意図とは違う方向で話し合いが進んでしまった。その原因として、問いの内容を含めた話し合いの条件を明確にでき

ていなかったことが考えられる。加えて、当事者の立場を考える際に生徒がどれだけ当時の状況をイメージできているかが重要であるが、それが上手くいかなかった。生徒にとってより身近で馴染みのある例示を行う必要があった。

- 生徒の記入したワークシートを見ると、授業のポイント等を自分なりの言葉で分かりやすくしようという工夫は見られたが、疑問点を記入させる指示が明確でなかったため、この授業の中で疑問を表面化させることができなかった。生徒の変容を把握し、次時以降に生かす手段については課題が残った。

5 1年間の総括

(1) 研修の成果

① 生徒の興味・関心を引き出す教材の工夫

生徒の興味・関心を引き出すために、ICTや自作のワークシートを用いて資料や発問の提示方法に変化を与えることは有効であった。これまでの授業と比較して生徒の取り組み方に変化が生まれ、受け身の姿勢で授業を受けていた生徒にも、問いについて意欲的に考えようという姿勢が感じられた。特に、以前は教員が答えを書くまで何も記入しなかった生徒が、自分なりに何かを記入する姿を見せるようになったことは、自作ワークシートの工夫の成果であったと考える。また、説明された事を単純に書き写すのではなく、自身が分かりやすいように書き方を変えたり、補足でメモをしたりなどの工夫をするようになった。絵画の活用についても、歴史の学習を単純な暗記と捉える生徒の認識を変え、理解を促しながら興味・関心を引き出すために一定の効果があった。表1は、4月実施のアンケートと12月実施の聞き取り調査において、歴史に対する興味・関心の有無とその理由について聞いた質問に対して得られた生徒の回答の一部である。生徒Aのように、以前は歴史に興味・関心のなかった生徒の中にも、絵画を通して歴史への興味が生まれたという生徒が見られた。また、これ以外にも12月の聞き取り調査では、「視聴覚教材があったのでイメージしやすい」「あとで勉強をした時に絵や図がきっかけで理解したことを思い出せる」との回答があり、教材の工夫によって、生徒の興味・関心や学習意欲を引き出すことができたということが分かった。さらに、もともと歴史に興味を持っていた生徒には、より主体的に歴史を学ぶ姿勢が生まれた様子がうかがえた。

	調査実施時期	興味・関心の有無	理由
生徒A	4月	ない	難しいから。
	12月	少しある	絵画の意味は最初分からなかったが、授業を通して意味が分かると面白い。
生徒B	4月	ある	日本史が好きだった。
	12月	ある	世界史にも興味を持つようになって、毎日スマートフォンで皇帝や活躍した人物を調べている。

表1 歴史への興味・関心に関するアンケート等の結果（一部抜粋）

② 生徒の興味・関心を引き出す指導法の工夫

多くの生徒はこれまで、歴史的人物を、名前や何をしたのかを覚えるだけの対象として見ていたが、人物に焦点を当てた指導法によって、歴史を別の視点から認識することができるようになった。特に、Ⅱ期の授業実践後に行った授業の学習プリントに、「この時代に活躍した女性是谁なのか気になった」「昔テレビで見たことがあった人なのでもう少し調べてみたい」といった記述があり、少しずつ生徒の興味・関心を引き出すことができていると感じた。12月の聞き取り調査でも、「ナポレオンについて調べた」「歴史上の人物の家族に興味を持った」「マリーアントワネットを自分で調べ

た」等の回答が複数あった。特に、女子生徒であることから、歴史上の女性に対する興味が生まれたようである。

また、グループ学習の形態を用いてそれぞれの人物の立場から考えさせたことによって、自分の考えを表現することが苦手な生徒であっても、周りの意見を聞きながら、自分の言葉で表現しようとする姿勢が見られ、歴史に対する興味・関心を持ちにくい生徒であっても、歴史的事象に対して自分なりの考えを持たせることができ、グル

ープ学習はその点でも有効であったと言える(図2)。加えて、グループ学習の中で異なる立場から考察する方法を経験したことで、自身に置き換えて考えたり、より多面的な見方をしたりすることができるようになった生徒も見られた。例えば、授業実践の中で「自分だったら」という発言が見られたり、実践以降の授業で、「A国の立場なら」「B国の立場なら」と考えることができたりと、歴史を様々な立場から見ようとする態度が身に付いた生徒がいた。

	生徒の感想
生徒C	話し合ったり、自分で意見をまとめたことで、普通の授業よりも覚えられたり、興味を持つことができた。
生徒D	写真や絵などを使った授業で分かりやすかった。 あと、自分だけでなく、まわりの意見を聞くことができる、グループでの授業は、理解しやすかった。

図2 授業に対する生徒の感想(一部抜粋)

(2) 今後の課題

授業実践を通して、生徒が歴史的事象に興味・関心を持ち、自ら「知りたい」と思う授業を目指し、教材と指導法の工夫を実践してきた。生徒が歴史を身近に捉え、少しでも歴史を学ぶ面白さを実感できる授業を今後も行っていきたい。そのために重要となるのが、発問と資料の精選である。生徒が課題に対して迷うことなく、何を考えれば良いのかが明確であれば、生徒の興味・関心を引き出しやすい。Ⅰ期、Ⅱ期ともに、どのような発問が適切であるかは大きな課題であったと感じる。

また、歴史的事象に関係する人物の立場から考えるという方法では、生徒がその当時をどれだけ具体的にイメージできるかが重要であると感じた。特にⅡ期の実践では、当時の身分による格差を具体的にイメージさせるため、服装を紹介する等の工夫を行ったが、当時の状況をどのようにイメージしたかについては生徒によって個人差があったようである。より身近で分かりやすい例示をしたり、現代の生活に置き換えた説明をしたりする等、イメージの共有化とその方法が今後の課題である。

さらに、生徒が歴史的事象に対する理解を深め、歴史を学ぶ面白さを感じることで授業を目指すためには、生徒が何に興味・関心を持ち、どのように理解しようとしたかを継続的に見取り、生かしていくことが重要である。実践では、振り返りシートと、ワークシートを活用したが、一時的な興味・関心をつかむことはできても、それが維持されているか、あるいは高まっているかをつかむことが難しかった。今後、実践を重ねる中で、どのようにすれば生徒の変容をより的確に把握できるか、そして、その変容を学習の深化にどのように生かすことができるかを検証していきたい。

以上のことを今後の課題として、更に研修を深めていきたい。

主な参考文献

文部科学省：「高等学校学習指導要領解説 地理歴史編」(平成22年6月)

東京大学C o R E F：「協調学習 授業デザイン ハンドブック 第2版」(平成29年3月)

図表等の許諾について

表1と図2は授業アンケート調査と聞き取り調査の結果の一部である。回答生徒の氏名を伏せて掲載することとし、生徒の保護者から使用許諾を得た。